

2 人間関係を築く力の育成

(1) 教育活動の工夫

コミュニケーションスキルの向上を目指した取組

当別町立当別小学校

効果的な取組とするためのポイント

特別活動（学級活動）において、他人との望ましい関わりの大切さについて、児童の自覚を深めることを目的として、コミュニケーションスキルに関わる講演等を実施した。

取組の実際

コミュニケーションスキルの向上を目指した第6学年における特別活動（学級活動）

ねらい：コミュニケーションスキルに関わる講演を通して、他人との望ましい関わりの大切さについての自覚を深める。

実施日：平成24年12月20日（木） 第5、6校時

講師：北海道医療大学心理学部教授 富家 直明

場所：当別町立当別小学校 体育館

概要：当別小学校第6学年児童を対象に、富家教授を講師に招聘し、講演会を実施した。他者との関わり方の基本的な3パターンについて、医療大学の学生によるロールプレイを見て、振り返りを行った。



- 相手との関係の3つのパターンである「遠慮型」「自己中心型」「アサーティブ型」の説明
富家教授は、第6学年児童に対して、中学校へ入学したら色々な場面で「アサーティブ型」の対応ができるような力を身に付けて欲しいと述べていた。
- ロールプレイ
医療大学の学生により、部活動に入部を決める場面や家庭科の調理実習のグループ決める場面で起こり得る状況を設定した「ロールプレイ」が行われた。その中で、「遠慮型」「自己中心型」「アサーティブ型」について、熱のこもった演技を見せてくれた。児童は普段の自分を振り返りながら、ロールプレイを鑑賞した。
- 振り返り
講演会の終盤では、児童の感想を交えながら振り返りを行った。

(児童の感想)

- ・誰もが傷つかず、上手に人と関わるには、「アサーティブ型」になるようにすれば良いことがわかりました。
- ・「遠慮型」は良さそうに見えるが、誰も良いことにならないことがわかりました。
- ・「アサーティブ型」になれるようにがんばります。

成果(○)と課題(●)

- 第6学年児童は中学校への進学や人間関係について不安を感じている場合もあるため、講演会のロールプレイを通して、自分に置き換えて考えることができたことは有意義であった。
- 講演会終了後、校長が大学生を対象に学校経営の講話を実施したことにより、小学校と大学が連携し合える関係の基盤をつくることができた。
- 中学校入学後の様子を把握して、小学校で学んだコミュニケーションスキルが生かされているかを検証し、必要に応じて、本講演会を振り返る場面を設定する必要がある。

2 人間関係を築く力の育成

(1) 教育活動の工夫

予防的・開発的な教育相談を取り入れた取組

七飯町立大中山中学校

効果的な取組とするためのポイント

人間関係を築く力を育成する予防的・開発的な教育相談を進める上で、指導者が教育相談の手法について理解を深める必要があることから講師を招いて研修会を実施した。特別活動における実践に当たっては、その時期や児童生徒の実態、集団の状況に応じて活動を選択・設定した。

取組の実際

1 教育相談の手法について理解を深める研修会の実施

生徒指導、教育相談、教育相談の意義や用いるカウンセリング技法などについて、専門家を講師とした全教員を対象とする校内研修会を実施した。



講師の講話



演習（体験活動）

- ・5月16日（水）大中山中学校にて
- ・講師：大杉ユリ子スクールカウンセラー
- ・対象：大中山中学校全教員
- ・講話：生徒理解、教育相談の進め方、教育相談の手法について
- ・演習：構成的グループ・エンカウンター、ソーシャルスキルトレーニング、アサーショントレーニング、ピア・サポート活動の体験

〈教員アンケートの記述から〉

「書籍では理解できなかったことが体験して分かった」
「自分がやっていたことを見直すきっかけとなった」
「『ごちゃまぜビンゴ』は英語版にすると授業でも活用できる」

2 実施時期、児童生徒の実態、集団の状況に応じた予防的・開発的な教育相談の取組と教科指導

不適応の未然防止、自他を高め合える望ましい集団づくりに向けて取り入れる予防的・開発的な教育相談も、入学直後、人間関係の広がる時期、学期のスタートなど、実施時期とこれまで実施した教育相談の手法を考慮して活動や内容を工夫している。

また、人間関係を形成する力を効果的に高めることができるように、教科の指導においてもコミュニケーション活動を意図的に取り入れている。



特別活動：生徒の活動の様子

〈一年間の大まかな流れ〉

特別活動

望ましい集団づくりに関わる学級活動

4月：学級開き

仲間づくり、集団づくり

7月：1学期の振り返り ↓

2学期：仲間づくり ↓

2学期の振り返り ↓

学年末：2年生に向けて ↓

仲間や集団との関わり方を振り返ろう

「自分BINGO」

・体育大会、学校祭など、大きな行事が終了し、入学からの自分の成長に気付かせながら、集団や他者との関わり方について考えさせた。

教科指導：コミュニケーション活動を取り入れ、思考力・判断力・表現力と人間関係を形成する力を高める。

外国語科（英語）

・対話を発展する活動を重視した。



外国語科（英語）：授業の様子

成果(○)と課題(●)

- 体験的な活動を取り入れることにより、生徒自身によりよい人間関係づくりの大切さを感じながら、日常生活で実践していこうとする意欲を高めることができた。
- 全教員が共通理解を図ることができるよう、小・中学校合同の教員研修会を実施し、9年間を見通した取組を進める必要がある。

2 人間関係を築く力の育成

(1) 教育活動の工夫

ソーシャルスキルの育成に関わる学習の取組

江差町立江差北小・中学校

効果的な取組とするためのポイント

社会性やコミュニケーション能力の育成をねらいとして、特別活動や総合的な学習の時間等において、それぞれの学習活動に関連したソーシャルスキルの育成に関わる学習に取り組んでいる。効果的な指導を行うためには、児童生徒の実態に基づき、身に付けさせたいコミュニケーションスキルを明確にした年間指導計画を作成し、計画的に取り組むことが大切である。また、小・中学校の継続的な指導や児童生徒の交流をねらいとして、小・中学校がソーシャルスキルの育成に関わる学習を合同で実施する機会を設けている。

取組の実際

平成24年度 ソーシャルスキルの育成に関わる学習の年間指導計画					
月	小学5年	小学6年	中学1年	中学2年	中学3年
4月					
5月					
6月			オリエンテーション 聞き方三態(話の聞き方・共感性)		
7月	聞き方三態(話の聞き方・共感性)				
8・9月			私はだれか(自己理解・自己洞察)①		
10月			私はだれか(自己理解・自己洞察)②		
11月	いいところ探し(他者理解・自己理解・自己洞察)				
12月					
1月					
2月	好ましい挨拶(礼儀、挨拶の仕方)				
3月					



◆事後の生徒感想
(聞き方三態より)
・聞き方ひとつ違うだけで、こんなに態度が変わるんだと思った。

◆具体的な内容

- 聞き方三態…①「気が乗らない聞き方」②「偉そうな聞き方」③「関心をもった聞き方」の聞き方に関するロールプレイを体験し、望ましい話の聞き方について話し合う。
- 好ましい挨拶…①「形だけの挨拶」②「元気のない挨拶」③「元気のある挨拶」の挨拶の仕方に関するロールプレイを体験し、好ましい挨拶の仕方について話し合う。

成果(○)と課題(●)

- アセスの結果から、社会的スキルや友人サポートに課題を抱える子が、約4割から約2割に減少した。また、感想から、ソーシャルスキルの必要性に対する児童生徒の認識の深まりを読み取ることができた。
- 年間指導計画を立案し、系統的・継続的な取組を行うことによって、ソーシャルスキルの育成に関わる学習を充実させることができた。
- 同内容の題材を繰り返し扱っていると、子どもたちの「期待感」が薄れ、学習効果も上がらなくなる。今後は、切り口を工夫するなど、新たな活動にしていく必要がある。

2 人間関係を築く力の育成

(2) 交流活動の工夫

児童会・生徒会の交流の取組

夕張市立夕張中学校

効果的な取組とするためのポイント

小・中学校の児童会・生徒会に高校の生徒会が加わり、いじめ撲滅を目標に実践している諸活動の様子を交流し、それぞれの活動の参考にする。

取組の実際

「ゆうばり 仲間づくり『子ども会議』」の実施

- 小・中・高等学校が、同学級・学年内だけではなく、学年を超えて人間関係（仲間づくり）のために実践している諸活動を交流した。
- 会議は、小・中・高等学校の児童会・生徒会の代表者が出席した。
- 会議の進行は、中・高校生が行った。
- それぞれの学校の活動に対して、その実施方法等について多くの質問が出された。
- 小学校の学習発表会、中・高等学校の学校祭等の大きな行事以外の日常的な取組を知ることで刺激を受けるとともに、興味をもつことができた。



イエローリボンづくり

夕張市では、以前から『幸せの黄色いハンカチ』が市民に浸透しており、黄色をシンボルカラーとして、「いじめをしない、させない、明るい学校づくり」を意味するイエローリボンを作成し、中学校では生徒会活動の中に取り入れている。

「ゆうばり 仲間づくり『子ども会議』」では、小・中・高校生に広めるため、全員で作成し、各学校へ持ち帰った。



成果(○)と課題(●)

- 各学校の児童会・生徒会の代表の児童生徒による子ども会議を実施したことにより、互いの活動に刺激を受け、それぞれの学校の取組への意欲を高めることができた。
- 各学校の児童・生徒全体の取組にと広げるため、教師の働きかけや指導の工夫が必要である。

2 人間関係を築く力の育成

(2) 交流活動の工夫

児童会と生徒会の交流

当別町立当別小学校・当別中学校

効果的な取組とするためのポイント

第6学年児童が、中学校入学に対する不安を解消するとともに、中学校における生活について理解することを目的として、生徒会役員が当別小学校を訪問し、児童会との交流活動を実施した。

取組の実際

1 事前準備

- 1 1月 5日 新生徒会役員認証式・委員会（小学校訪問についての打合せ）
- 1 1月 12日 生徒会役員で実施細案検討（リーフレット作成）
- 1 1月 16日 小学校で実施した事前アンケートの回収・集約

2 交流（11月27日実施）の流れと様子

(1) アイスブレイキングを取り入れた自己紹介ゲーム

何でもバスケットなどのゲームを取り入れた自己紹介を行うことにより、互いの距離を近付けることができた。



(2) 児童会活動、生徒会活動の紹介

小学校からは、エコキャップとリングプルの回収や、雪祭りの計画などの活動経過報告、生徒会からは代表委員会と協力して行ったエコキャップ回収や生徒会委員会の日常活動の様子などを紹介した。



(3) 中学校生活についての説明

生徒会役員が、事前に作成した「当別中学校リーフレット」に基づき、児童会役員に説明した。

児童会活動の発表の様子

【リーフレットの内容】

- I 当別中学校の1年間
- II 生徒会長の1日
- III 部活動紹介
- IV 当別中学校Q&A

「当別中学校Q&A」には、第6学年児童に記入してもらったアンケートから、特に多かった質問についての回答を掲載した。

また、今年度は全校生徒からのメッセージカードを作成した。「当別中学校はどういうところか」「部活動はどういう雰囲気か」「どのような勉強をするのか」などのアドバイスと、新入生を歓迎する言葉が書かれており、小学校において好評であった。



(4) 質疑応答

【児童会】・部活動には必ず入るのですか？

・勉強はどれくらいやっていますか？

【生徒会】・他に何かやってみたいと思っていることはありますか？

・中学校について話をしたりしていますか？



3 事後の取組

中学校では、生徒会通信を作成し、小学校訪問の内容を全校生徒に伝えた。メッセージカードの写真を掲載し、メッセージがしっかり伝わったことを周知することができた。

小学校では、第6学年児童全員にリーフレットを配付し、児童会役員から、今回の交流会で説明された内容を伝えた。

成果(○)と課題(●)

- 事前指導に時間が必要であるが、学校の様子を交流できる良い機会とすることができた。
- 交流を通して、児童会・生徒会役員のリーダー性を育成することができた。
- リーフレットを活用し、基本的な情報を第6学年児童全員に伝えることができた。
- 複数の小学校から中学校へ入学する地域で行う際は、交流を工夫する必要がある。
- 基本的な情報を小学生に伝える交流活動を、継続して実施する必要がある。

2 人間関係を築く力の育成

(2) 交流活動の工夫

新入生交流会の取組

網走市立第二中学校

効果的な取組とするためのポイント

新1年生が、中学校の生活にスムーズに移行できるよう、入学前の小学校第6学年の児童を中学校に招き、学校紹介やゲーム等の活動を行うことにより、第二中学校についての理解と、入学後の悩みや不安の解消を図る。

取組の実際

1 新入生交流会の実施

2月、連携校の小学校第6学年の児童を中学校に招き、中学校第1学年の生徒との交流会を開催した。全体でゲームを行った後、中学校の代表生徒が中学校生活について説明し、質疑応答を行うなど、小学校第6学年の児童の中学校入学に当たっての悩みや不安を解消するよう取組を工夫した。入学前の不安の解消のほか、入学後の人間関係形成能力の育成や、いじめ・不登校等の未然防止もねらいの1つである。



2 新入生交流会の内容について

新入生交流会の内容は、中学校第1学年の生徒が主体となって計画をしている。今年度の内容は、スライドによる学校紹介・ゲーム・新入生からの質問などであった。本校では、ピア・サポートに取り組んでいることから、人間関係づくりに役立つゲーム等を取り入れ、小・中学生の交流を図った。新入生からの質問では、新入生の中学校生活への不安要素を解消するため、事前に各小学校に依頼して質問事項を取りまとめてもらい、それらをもとに中学生が自分たちの体験をもとに質問に答えた。

3 「網走市こども会議」での活動報告

網走市では、市内の小学校及び中学校の児童会・生徒会の代表者が一堂に会し、いじめをなくすためにどのような取組が行われているかを交流する会議を開催しており、「新入生交流会」をはじめとした、本校の生徒会活動や交流活動について報告を行った。今後、本会議において、校区内の小・中学校の児童会と生徒会の交流の促進を図りたい。

成果(○)と課題(●)

- 事前に小学校第6学年の児童から中学校に対する質問を取り、それに対して中学校第1学年が答える形を取ることで、新入生の不安の解消につながった。
- スライドを用いた学校紹介では、小学校第6学年の児童に中学校での生活が十分イメージできていないと思われる部分もあったことから、入学以降も、新入生の不安や悩みを解消するための具体的な取組を検討する必要がある。

3 児童生徒へのきめ細かな対応

(1) 生活アンケートの活用

『ほっと』を活用した取組

七飯町立大中山小学校・大中山中学校

効果的な取組とするためのポイント

児童生徒の人間関係形成能力に係る課題を全教員で共有し、組織的な取組を実施するためには、子ども理解支援ツール『ほっと』などの各種検査を実施し、客観的な資料を基に分析・考察を進めることが大切である。本校では『ほっと』を実施し、項目の変化などを把握し実践を進めた。

取組の実際

1 子ども理解支援ツール『ほっと』の実施と活用

○ 継続的な調査による項目の変化や推移の分析

『ほっと』を実施し、小学校第6学年時の調査結果と、中学校入学後の結果を比較し、重点的に指導する項目の参考としている。

中学校で伸びが見られた項目や、伸びがあまり見られない項目を洗い出し、学年で協議し、共通理解を図り取組に生かしている。

『ほっと』の分析結果を生かした取組

〈課題とする項目：入学後、あまり伸びが見られない項目〉

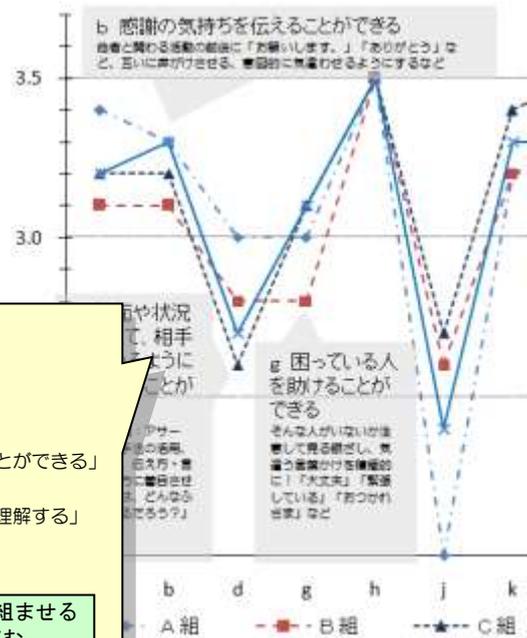
- 「n まわりに迷惑になる人に注意することができる」
- 「o 注意されたときなどに、いやな気持ちを態度に出さない」
- 「r 司会や班長として、具体的に指示を出したり、意見をまとめたりすることができる」

〈一層の伸長を図る項目：入学後、伸びが見られた項目〉

- 「q お互いに協力して教えあう活動を通じて、お互いをたかめあう有用性を理解する」
- 「k 励ます、ほめることをする、これらに対する喜び」
- 「j 緊張して人前で話すことができないことがある」

→2学期以降：生徒一人一人が互いに認め合い、協力して物事に取り組みあう中で、指示を出したり、意見をまとめたりする力を育む。

平成24年度8月実施『ほっと』集計データ



2 中学校生活の不安に関するアンケートの実施と小中が連携した課題への取組

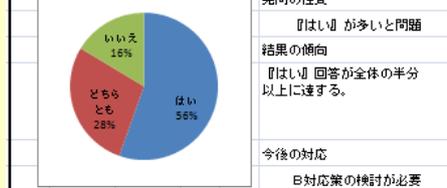
大中山小学校で「中学校生活で不安なこと」アンケートを実施し、学年全体、各学級の状況を集計している。アンケート結果は、中学校に提供され、中学校教員による小学校児童への「出前授業」（本年度、2月25日開催）や、映像資料による「中学校生活の紹介」、「中学校入学説明会」の説明の参考としている。

また、小・中学校合同検討会議では、アンケート項目について見直し、より一層、きめ細かな対応に努めている。

小学校第6学年へのアンケート項目から

No.	質問
①	勉強がすごく難しくなるのではないかと不安を感じる
②	勉強の仕方がどうなるのかわからない
③	先生が長時間変わる事が慣れない
④	英語や技術といった新しい教科が不安だ
⑤	定期テストの結果で成績や進路が全てが決まると思っている

① 勉強がすごく難しくなるのではないかと不安を感じる



疑問の性質
『はい』が多いと問題
結果の傾向
『はい』回答が全体の半分以上に達する。
今後の対応
B対応策の検討が必要

アンケートの集計結果と分析から

成果(○)と課題(●)

- 『ほっと』を複数回実施することにより、児童生徒の人間関係形成能力に関する客観的なデータを得ることができるようになり、取組を考える際の資料とすることができた。
- 調査結果を教育活動により反映するためには、項目に対応する活動例を設定する必要がある。

3 児童生徒へのきめ細かな対応 (1) 生活アンケートの活用

小中合同の分析、学習会の実施

東神楽町立東神楽中学校

効果的な取組とするためのポイント

小中合同の交流会を実施し、子ども理解支援ツール「ほっと」の目的や結果を踏まえた教育相談について共通理解を図るとともに、実際に「ほっと」を活用し、どのように指導に生かしていくか協議を深めた。

取組の実際

1 「ほっと」の実施にあたって

昨年度の本事業の本道の結果から、児童生徒の問題行動の未然防止に関わって、コミュニケーション能力に課題があることが明らかとなった。このことから、本町における、「中1ギャップ問題未然防止事業」を推進するため、児童生徒のコミュニケーション能力を子ども支援ツール「ほっと」の実施により把握し、各学校、学級における指導に生かすこととした。

「ほっと」の実施に先立ち、各学校に対する「ほっと」を実施する意義や実施方法について周知を図るため、上川教育局義務教育指導班と連携を図り、中1ギャップ問題検討委員会において研修会を実施し共通理解を図った。

2 取組の実際

町内の各学校が統一した方向で「ほっと」を活用できるよう共通した流れを作成して取り組んでいる。

7月に「ほっと」を実施し、8月に結果の確認と分析を実施した。その後、小中合同学習会を実施し、分析結果を持ち寄り、13の要素に関わる状況を交流し、小・中学校の取組について協議を行った。

9月には、「ほっと」の結果と8月実施の「いじめアンケート」や行事における児童生徒の様子、日常の学習の様子のデータをもとに教育相談を実施した。その後、生徒指導事例研修で情報交流を行い、必要な児童生徒について再度教育相談を実施した。

12月には、小中合同で、各校の生徒指導事例研修の概要や「ほっと」の2回目の結果の状況、引継ぎの在り方について協議を行った。

3 「ほっと」を共通の視点とした小・中学校の交流

これまで、中学校では、友人関係にトラブルの多い第2学年において、学校生活意欲と学級満足度を把握するためQ-Uを実施し、子どもの心に寄り添った指導の充実を図ってきた。さらに今年度は、小・中学校全学年において「ほっと」を活用した。その結果、いじめ・不登校等の問題行動の未然防止に必要とされるコミュニケーション能力（13の要素）について、より具体的に実態を把握することができた。「ほっと」を全町で活用することで小・中学校の教員が9か年を通して育むべき能力が明確となり、今後の指導の方策や指導場面をプランニングすることができた。

【児童生徒の実態把握】

7月 「ほっと」の実施
8月 「ほっと」の分析

【小中合同学習会①】

8月 「ほっと」の分析結果を
活用した取組の交流

【教育相談】

9月 「ほっと」の結果等を踏
まえた教育相談の実施

【小中合同学習会②】

12月 「ほっと」(2回目)の
結果、取組の交流

成果(○)と課題(●)

○ 「ほっと」を小学校第1学年から中学校第3学年まで実施し、小・中学校の教職員が合同で分析結果を活用した指導に関わる学習会を実施したことで、共通した指導を行うことができた。

● 今後は、「ほっと」の分析結果を活用した効果的な指導の在り方について、さらに研修を深める必要がある。

3 児童生徒へのきめ細かな対応

(1) 生活アンケートの活用

『Q-U』『ほっと』を活用した 児童生徒理解と学級適応支援の取組

網走市立第二中学校

効果的な取組とするためのポイント

小・中学校の教員が、合同で『Q-U』の活用方法についての研修を行い、児童生徒理解をより充実させるための教育相談について共通理解を図るとともに、『Q-U』や『ほっと』の結果に基づいた教育活動の改善・充実に取り組む。

取組の実際

1 生活アンケート『Q-U』に係る研修会の実施

前年度に本校で実施していた『Q-U』を、同校区内の各小学校においても実施することになった。実施に当たり、合同の研修会を行うこととし、研修会に向けた小・中連携の担当者会議において、『Q-U』に係る基本的な考え方等について事前の情報提供を行った。

9月26日、網走市立第二中学校において、小・中学校の教員による合同の生徒指導研修会を実施し、釧路工業高等専門学校の上野教授を講師に迎え、『教育相談の実践と方法』や『Q-Uを活用した生徒理解』について講演を行った。



【Q-U研修会】

2 生活アンケート『Q-U』『ほっと』の実施

前述の研修会において、上野教授から「『Q-U』と『ほっと』を上手に併用することで、より充実した児童生徒理解に生かせる。」との助言を受け、両生活アンケートを計画的に実施することとした。

『Q-U』については、年3回、6月（運動会後）、9月（学校祭後）、2月（年度末）に実施し、児童生徒の学校適応感について定期的に把握するとともに、教育相談に活用した。『ほっと』については、毎月の振り返りシートに換えて10月に実施し、生徒のコミュニケーション能力の状況について把握するとともに、日常の学校生活における生徒同士が関わり合う場面の工夫や人間関係づくりに向けた活動を検討する際の材料とした。

3 今後の活用方法について

小学校から中学校への引継ぎを円滑に進めるために、各小学校で実施した『Q-U』のデータを基に、引継ぎシートを作成することとした。内容については、『Q-U』を実施した児童の実態を分かりやすく表記できるよう検討している。

成果(○)と課題(●)

- 生活アンケート『Q-U』を定期的実施することで、児童生徒理解を的確に行うことができ、きめ細かな教育相談を実施することができた。
- 子ども理解支援ツール『ほっと』を活用するに当たり、集計されたデータをどのように分析し、どのように活用したらよいかの研修が必要である。

3 児童生徒へのきめ細かな対応

(1) 生活アンケートの活用

アセスを活用した人間関係づくりの取組

標津町立標津小学校・標津中学校
標津町立川北小学校・川北中学校

効果的な取組とするためのポイント

児童生徒一人一人の学校適応感を高めるために、生活アンケートとして実施している「アセス」を活用し、結果分析から明らかになった課題について教員研修を行うとともに、生徒会主体の様々な活動の中で、児童生徒のソーシャルスキルの育成を図っている。

取組の実際

1 アセスの結果を参考に教育相談の充実

児童生徒の内面や適応感を測定するためにアセスを実施し、その結果を基に学年間で児童生徒一人一人の状況について分析し共通理解を図った。そして、学校適応感をさらに高めるための方策を学年で練り合い、教職員全体で検討した。その後、分析の結果や具体的な方策を基に、児童生徒の日常の様子を把握した上で教育相談を実施し、より児童生徒一人一人に寄り添うことができるようにした。

2 人間関係・信頼関係づくり

学校適応感を高めるために、アセスの結果から見えた児童生徒の課題に対応するよう、教員研修や生徒会主体の活動を意図的・計画的に設定し、よりよい人間関係・信頼関係づくりに取り組むこととした。

(1) 構成的グループ・エンカウンターを活用した人間関係づくり

教師が意図的に設定したソーシャルスキルトレーニングや、生徒会役員が町の福祉ボランティアに参加した様々な経験を生かした生徒会行事を企画し、構成的グループ・エンカウンターを行った。

各プログラムの終わりには、全校生徒で活動について振り返り、お互いの気持ちを確認するようにした。

(2) 児童生徒の交流

児童会と生徒会の交流を図り、次年度の中学校1年生と中学校3年生の関係づくりの基盤を養う活動として小学6年生と中学2年生のミニ運動会を企画した。また、中学校進学への不安を取りのぞくことができるよう生徒会新聞で「いじめ0宣言」を発行し、小学校にも配付した。



【ソーシャルスキルの育成】



10月27日に行われた、「どさんこ☆子ども全道サミット」に参加した生徒会が「いじめ0宣言」の新聞を発行。

成果(○)と課題(●)

- 生活アンケートの結果分析を生かした生徒会の活動を位置付けることにより、生徒の自治的な力が育まれ、児童生徒が自分たちで学校生活を円滑なものにしていこうとする意識が醸成された。
- アセスの結果と日常の児童生徒の様子を関連付け、継続的に教育相談を実施するなどして実態把握をするとともに、アセス等の分析や結果を活用した効果的な指導について研修を深め、児童生徒を見る目を養う必要がある。

第3章

検 証 編

第3章では、平成24年度「中1ギャップ問題未然防止事業」の成果と課題について掲載します。

指定校区におけるいじめ・不登校の状況

指定校においては、いじめを積極的に認知し、解消に向けた取組の充実を図っています。

指定校においては、いじめを受けた児童生徒の在籍比が、小・中学校共に、全道・全国より高くなっています。一方、いじめの解消状況は、小・中学校共に、全道・全国の解消率よりも高くなっています。

このことから、指定校においては、いじめの未然防止に向けた取組の充実に努めるとともに、いじめを積極的に認知し、解消に向けた取組の充実を図っていると推察できます。

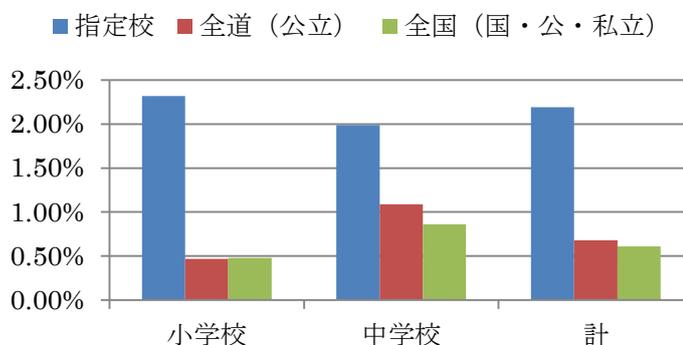
指定校においては、新たな不登校を生まない取組の充実を図っています。

指定校においては、不登校児童生徒の在籍比が、中学校及び小・中学校の計で全道・全国より低くなっています。また、不登校の解消状況は、中学校及び小・中学校の計で全道を上回っています。

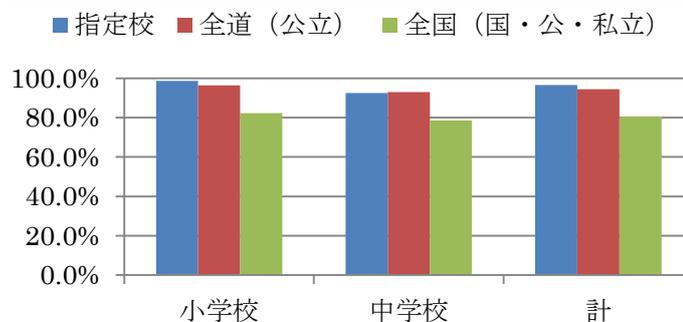
このことから、指定校においては、新たな不登校を生まない取組の充実を図るとともに、不登校児童生徒の学校復帰に向けて組織的に取り組んでいると推察できます。

今後においては、いじめを受けた児童生徒の在籍比や解消率、不登校児童生徒の在籍比や解消率について、小学校第6学年のデータと、翌年度中学校第1学年のデータとを比較するなどして、本事業の成果を捉えることも考えられます。

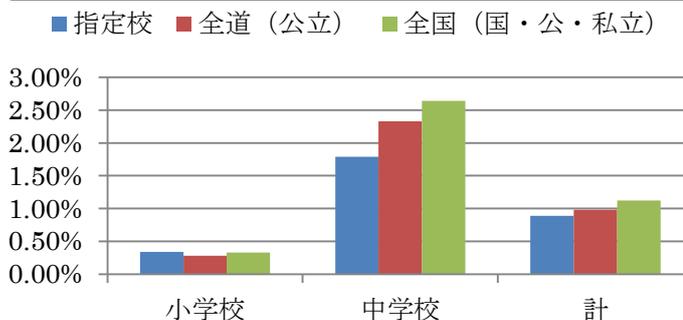
平成23年度におけるいじめを受けた児童生徒の在籍比の比較



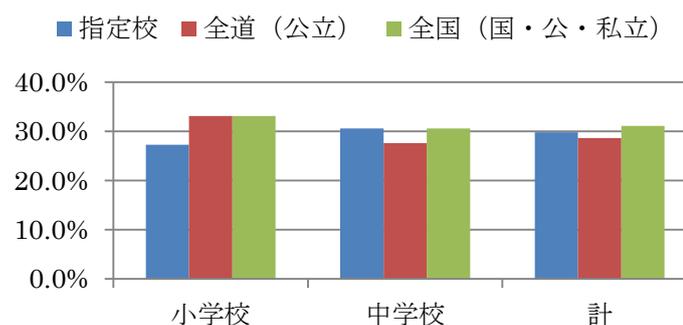
平成23年度におけるいじめの解消状況の比較



平成23年度における不登校児童生徒の在籍比の比較



平成23年度における不登校の解消状況の比較



平成 24 年度における本事業の成果と課題

◇ 成果

◆ 小・中学校の緊密な連携体制の充実

- 各指定校区の実態に応じ、既存の組織を活用したり、コーディネーターを位置付けたりするなど、小中連携の体制整備が進められた。
- 小・中学校の教員が、部会に分かれて協議を行ったり、有識者を招いた研修会を小・中学校合同で開催したりするなど、中1ギャップ問題とその対応について理解を深める体制整備が進められた。
- 「ほっと」やアセス、Q-Uなどの生活アンケートの結果を記載した引継ぎシートの作成など、生徒の具体的な支援につながる引継ぎの方法が工夫された。
- 中学校教員が小学校へ出向き、小学校外国語活動や算数等の出前授業を行う体制整備が進められた。

◆ 児童生徒の人間関係を築く力の育成

- ピアサポート活動やグループエンカウンター等の人間関係を築く教育活動が教育課程に位置付けられ、計画的に実施された。
- 各指定校区の実態を踏まえ、好ましい人間関係を築く多様な児童生徒の交流活動が工夫された。

◆ 児童生徒の学校生活への適応状況のきめ細かな把握と適切な支援

- 「ほっと」やアセス、Q-Uなどの生活アンケートを活用して、継続的に児童生徒の適応感等が把握され、適切な支援が進められた。
- 生活アンケートの結果から、児童生徒の教師への信頼感が高まったり、子ども同士の人間関係が構築されたりするなど、学校生活への適応感を高める指導が工夫された。

◇ 課題

◆ 小・中学校の緊密な連携体制の充実

- 構築した小中連携の体制について、保護者や地域への周知を図り、地域と一体となった取組を進める必要がある。

◆ 児童生徒の人間関係を築く力の育成

- 好ましい人間関係を築く力を育成する教育活動の一層の工夫改善を図るとともに、教育課程への位置付けを更に明確にする必要がある。

◆ 児童生徒の学校生活への適応状況のきめ細かな把握と適切な支援

- 好ましい人間関係を築くためのコミュニケーションに関する資質や能力を的確に把握して、個に応じた指導を工夫していく必要がある。
- 子ども理解支援ツール「ほっと」の活用方法等を学校全体で共通理解を図り、積極的に活用する必要がある。

資料

平成24年度中1ギャップ問題未然防止事業実施要項

(平成24年5月7日学校教育局長決定)

1 趣 旨

本道においては、小学校6年生が中学校1年生に進学した際、不登校の子どもが約3倍に増加するとともに、いじめの認知件数についても約2倍に増加している。

こうした現象の要因として、社会的スキルの定着が不十分等の個人的な要因、あるいは、家庭的な要因を抱えた子どもが、小学校から中学校への大きな環境の変化に適応できないといった小・中学校間の接続の問題（いわゆる「中1ギャップ」の問題）が指摘されている。

そこで、北海道教育委員会は、市町村教育委員会と連携し、子どもの人間関係づくりの能力の育成や小・中学校間の連携等を促進し、本事業における各地域の優れた取組を広く全道の学校や教育委員会等に周知する。

なお、本事業は、国が実施する「生徒指導・進路指導総合推進事業（問題を抱える子ども等の自立支援に関する調査研究：文部科学省委託事業10/10）」を活用し、本年度、北海道教育委員会が実施する「子どもの人間関係づくり推進事業」に位置付けて実施するものである。

2 調査研究事業の実施手続

- (1) 調査研究の実施を希望する市町村教育委員会は、別紙様式による「平成24年度中1ギャップ問題未然防止事業実施計画書」（以下「実施計画書」という。）を添付し、教育局長を経由して学校教育局参事（生徒指導・学校安全）に申請するものとする。
- (2) 学校教育局参事（生徒指導・学校安全）は、上記（1）により提出された実施計画書の内容を審査し、実施市町村教育委員会を決定し、教育局長経由で実施市町村教育委員会に通知する。
- (3) 実施市町村教育委員会は、実施計画書等の内容を変更する場合は、事前に教育局長経由で、学校教育局参事（生徒指導・学校安全）に変更した実施計画書を提出すること。

3 実施市町村数

7市町村程度とする。

4 委託期間

委託決定から平成25年2月28日まで

5 事業の内容

事業の委託を受けた市町村教育委員会は、「中1ギャップ」問題の未然防止につながる事業を実施するため、域内の公立中学校1校（以下「拠点校」という。）を指定するとともに、拠点校及び拠点校と連携する校区内の各小学校（以下「連携校」という。）とともに、学校や地域の実情に応じながら次のアの（1）からイの（3）までのすべての内容を実施する。

なお、イの（4）については、2年目に継続して実施している場合に必須とする。

ア 教育委員会を中心にした取組

- (1) 指定中学校区を単位とした「中1ギャップ検討委員会」の設置
 - ① 拠点校及び連携校が連携した、校区の中1ギャップ解消プランの作成
 - ② 児童生徒の交流活動、合同活動、教職員の出前授業等、小・中連携の取組の企画・立案
 - ③ 小・中学校の引き継ぎの充実
 - ④ PTAや地域人材等との意見交換や研修会の実施

※ 「中1ギャップ検討委員会」は中学校区に既存の組織が設けられている場合は、代替することを可とする。

イ 拠点校及び連携校を中心とした取組

(1) 事業推進体制の整備

- ① 各学校3名程度の事業推進のための中心スタッフの任命
- ② 中心スタッフや有識者、指導主事等を講師とした校内研修の実施
- ③ 学校評価等を通じた取組の検証、改善

(2) 児童生徒の内面へのきめ細かな対応

- ① 生活アンケートの年3回の実施
- ② 中心スタッフ等によるアンケートの分析、校内研修、学年部会等での活用

(3) 人間関係づくりの能力（社会的スキル）の育成を図る教育課程の工夫改善

- ① 拠点校と連携校、連携校同士の児童生徒の交流活動の実施
- ② よりよい人間関係を築くために必要なスキルを育成する活動の教育課程への適切な位置付け
- ③ 生徒指導の機能を生かした教科指導の工夫

(4) 事業成果の啓発の取組

- ① 研究紀要の作成、インターネットへの掲載、公開研究会の実施など、成果を普及するための創意ある取組

(5) その他学校や地域の実情に応じた取組

6 事業の実施方法等

- (1) 北海道教育委員会は、本調査研究事業を実施する市町村教育委員会に事業の委託を行う。
- (2) 市町村教育委員会は、学校教育局参事（生徒指導・学校安全）及び教育局の助言を受けて事業を実施する。
- (3) 市町村教育委員会は、事業を実施するため、域内の公立中学校1校を拠点校として、拠点校の校区内の公立小学校を連携校として指定する。
- (4) 拠点校及び連携校の校長は、校長の監督を受け事業の実施に関する各種調整等を司る教諭3名程度を中心スタッフとして任命する。
- (5) 学校教育局参事（生徒指導・学校安全）は、事業の円滑な実施に資するため、年2回の運営協議会を開催する。
- (6) 学校教育局参事（生徒指導・学校安全）は、拠点校及び連携校における取組の充実を図るため、拠点校の中心スタッフ等を対象に、年2回の集団カウンセリング研修会を開催する。
- (7) 学校教育局参事（生徒指導・学校安全）及び教育局は、拠点校及び連携校における校内研修等の充実に資するため、要請に応じて、大学教員等の有識者や指導主事等を研修講師として派遣する。
- (8) 学校教育局参事（生徒指導・学校安全）は、全道の学校や教育委員会における中1ギャップ問題への対応の充実に役立てるため、調査研究の取組状況の広報に努める。

7 予算配分額

(1) 市町村への委託料

- ① 1市町村委託料 140,000円
- ② 委託料の額は、7市町村で実施する場合の1市町村当たりの額
- ③ 積算根拠は別紙3のとおり

- (2) 6（5）の運営協議会、6（6）の集団カウンセリング研修会の参加旅費（調査研究指定校）については、学校教育局参事（生徒指導・学校安全）が予算の範囲内で措置する。

8 調査研究の報告

- (1) 実施市町村教育委員会は、別途定める実績報告書及び収支決算書を作成し、平成24年2月28日までに、教育局長を経由して学校教育局参事（生徒指導・学校安全）に提出するものとする。
- (2) 支出関係書類については、他の経費と区分して適切な帳簿を用いて整理し、用途を明らかにするものとし、調査研究を実施した翌年度から5年間保存すること。

9 その他

- (1) 学校教育局参事（生徒指導・学校安全）は、必要に応じ、事業の実施状況及び経理状況等について、実態調査を行う。
- (2) この要項に定めのないものは、実施市町村教育委員会、教育局及び学校教育局参事（生徒指導・学校安全）が協議の上、決定する。

附 則

この要項は、平成24年4月2日から施行する。